

Title	三島作品における<内部>と<外部> : 「金閣寺」を中心に
Author(s)	出原, 隆俊
Citation	語文. 2004, 80-81, p. 93-104
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69029
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

三島作品における〈内部〉と〈外部〉

—「金閣寺」を中心に—

はじめに

日本近代文学において、「わが眼はあやしくもわが内をのみ見
外は見ず」（『蓬萊曲』）と記した北村透谷をはじめとして、〈内部〉
と〈外部〉の問題は、〈個〉と〈社会〉、〈意志〉と〈運命〉、〈内心〉
と〈上辺〉、〈集団〉と〈個人者〉などの枠組みを初めとして、様々
な角度から検討できる課題であろう。鷗外、漱石、藤村、太宰、芥
川、大江：など、どの作家の作品についてもこの問題は解析の対象
となりうると思われるが、三島由紀夫の作品もまた、それを検討する
にふさわしい対象であると考えられる。ここでは、主要な作品に関
し、主として登場人物の置かれている状況について、〈内部〉と
〈外部〉の視点から検討することによって、ある種の方向性を見出
すことができるのと判断の下に、ひとつのアプローチを試みるもの
である。

—

たとえば、「金閣寺」の構成については次のように把握すること

ができる。まず、冒頭近くの部分を引用する。

吃りは、いふまでもなく、私と外界とのあひだに一つの障壁を
置いた。最初の音がうまく出ない。その最初の音が、私の内界
と外界との間の扉の鍵のやうなものであるのに、鍵がうまくあ
いたためしがない。一般の人は、自由に言葉をあやつることに
よつて、内界と外界との間の戸をあけつばなしにして、風とほ
しをよくしておくことができるのに、私にはそれがどうしても
できない。鍵が錆びついてしまつてゐるのである。

これは主人公の存在の有りよりの前提として語られる箇所である。
これには次の箇所が呼応する。末尾近く、火災警報器の故障が修理
されないままになっていて、主人公が金閣寺の放火を決意し、寺の
老師や父と親しかった和尚と対話した後、「残る隈なく理解された
と感じ」、「行為の勇氣が新鮮に湧き立つた。」と感じた時のこと
である。

私は口のなかで吃つてみた。一つの言葉はいつものやうに、ま
るで袋の中へ手をつつこんで探すとき、他のものに引っかかっ
てなかなか出て来ない品物さながら、さんざん私をじらせて唇

出原隆俊

の上に現はれた。私の内界の重さと濃密さは、あたかもこの夜の夜のやうで、言葉はその深い夜の井戸から重い釣瓶のやうに軋りながら昇つて来る。／＼『もうぢきだ。もう少しの辛抱だ』と私は思った。『私の内界と外界との間のこの錆びついた鍵がみごとにあくのだ。内界と外界は吹き抜けになり、風はそこを自在に吹きかよふやうになるのだ。釣瓶はかかるがと羽搏かればかりにありがた、すべてが広大な野の姿で私の前にひらけ、密室は滅びるのだ。……それはもう目の前にある。すれすれのところで、私の手はもう届かうとしてゐる。……』／＼私は幸福に充たされて、：

「内界と外界」に関わつての「扉」、「鍵」、「風」についての記述に見られるように、言葉のレベルの対応は疑うべくもない。ここで、「一つの言葉」とは何を指すのか。明示はされていないが、「金閣を焼かなければならぬ」、「金閣を焼けば」と独言した、「金閣を焼いたら」という表現が終結部に向けて集中していることを押さえて、「それは私と、私の志す人生との間に立ちほだか」る（第五章）という部分や「ほとんど呪詛に近い調子で、私は金閣にむかつて、生れてはじめて次のやうに荒々しく呼びかけた。「いつかきつとお前を支配してやる。」という箇所（第六章）があることを踏まえれば、「お前を焼いてやる」というようなことであるだろう。その言葉をわざと「吃つてみる」ことは、その実現を確信するが故であろう。「一般の人」には体験できない達成感を得られるという思いがあるのではないか。「吃」らなかつたときのことと対比しよう。

私は彼の視線の重みを支えるのに難渋した。が、破滅的といふ彼流の理解が、私の志すところから遠いのを思ふと、落着き

戻つてきた。答はつゆ吃らなかつた。

ことは逆に、自分を鼓舞するためにわざと「吃つてみる」のである。このことに加えて、終局部での、金閣寺に放火して、死の場所として選んだ究竟頂に入らうとする時の次の記述を参照しよう。

私は懸命にその戸を叩いた。誰かが究竟頂の内部からあけてくれるやうな気がしたのである。／＼扉は開かない。／＼ある瞬間、拒まれてゐるといふ確実な意識が私に生まれたとき、私はためらはなかつた。……戸外へ飛び出した。それから私は、自らどこへ行くとも知らずに、韋駄天のやうに駆けたのである。

これらから、作品の展開に當つて、「私の内界と外界との間の扉」のイメージに作者が明確に意識的であり、金閣を焼き扉を開く期待が、現実の扉が開かないことで成就されずに終わるといふ結末を用意していたことには疑う余地があるまい。

その展開を担うように、吃音の問題が繰り返し配置されている。「私」が、意図的に老師の怒りを誘発しようと仕向けるようになったころ、外出する老師を見送つた際のことである。自らの悪行を告白したいという思いを抱えていた。

そのとき私の内には異様な衝動が生れてゐた。大事な言葉が迸らうとして吃音に妨げられる時と同様、この衝動は私の咽喉元で燃えてゐた。……無言で私を支配し、私にのしかかつてゐるものから遁れたかつたのである。（第四章）

このときには、この後に「何ものかが私の背をしつかりと引いてゐた」とあるように、発話されなかつた。さらには、柏木が連れて来て、「私」に宛がった女に関して次のようである。

私はむしろ目の前の娘を、欲望の対象と考へることから遁れよ

うとしてゐた。これを人生と考へるべきなのだ。前進し獲得するためのひとつの関門と考へるべきなのだ。今の機を逸したら、永遠に人生は私を訪れぬだらう。さう考へた私の心はやりには、吃りに阻まれて言葉が出かねるときの、百千の屈辱の思ひ出が懸つてゐた。私は決然と口を切り、吃りながらも何事かを言ひ、生をわがものにするべきであつた。

(第五章)

また、寺の後継者にするつもりはないとの老師の言葉を聞いた後、自ら衝動であるかのようにしつらえて、出奔した時のことである。

私の胸は高鳴つた。出発せねばならぬ。この言葉はほとんど羽搏いてゐると云つてよかつた。私は環境から、私を縛りしめてゐる美の觀念から、私の軋軻不遇から、私の吃りから、私の存在の条件から、ともかくも出発せねばならぬ。

(第七章)

「遁れ」ることを願ひ、「前進し獲得」することを志そうとし、「出発」を決意しようとする。吃音が、自己の存在・人生に関わる根幹的な問題であると捉え、呪縛から自由になることを夢見る。これらが提示されるたびに、冒頭部におかれた「内界と外界との間の扉」のイメージが喚起されるであらう。

ところで、この「扉」のイメージには、どこやら漱石の「心」を連想させるものがある。引用しよう。「上」での「私」と「先生」が懇意になり始める箇所と、「下の」、遺書の冒頭部分である。

・けれども私に取つて其墓は全く死んだものであつた。二人の間にある生命の扉を開ける鍵にはならなかつた。寧ろ二人の間に立つて、自由の往来を妨たげる魔物のやうであつた。

・私は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなたの顔に浴せかけやうとしてゐるのです。私の鼓動が停つた時、あなたの胸

に新しい命が宿る事が出来るなら満足です。

同じように「私」によって語られる物語でありながら、「心」の場合、先生の自死があつたとしても、それを代償として、先生から私へと「扉」は「鍵」によって、あるいは心臓の扉を「破つて」開けられたといえよう。しかし、二人の人間の対話を軸として展開する「心」とは異なり、自閉する主人公を軸とする「金閣寺」は、「幸福に充たされた」「私」が、いったんは「激甚の疲労」に襲われ、さらに、「行為しなくてもよい」という最後の認識」に達しようとする。しかし、臨済録の言葉を思い出して行動に進みながら、繰り返す「扉は開かない」ことを認識させられるという、逆の展開である。「心」では、早い段階で「私」が先生の心情を理解しえたこと、つまり、扉が開いたことが、知らされるのである。「私」が吃音であることは「金閣寺」においては、原初的な枠組みであり、したがつて、扉が開くかどうかは、「内界と外界」として根幹的な問題であるといえよう。

二

「扉」が開かないということ、外界に到達できないことは、「金閣寺」において、先に見た大枠の中で、小さなエピソードとしても繰り返されるモチーフであつた。

・私は待つて、何をしようとしたのでもない。息をはずませて走つてきたのが、樺の木蔭に息を休めてみて、自分がこれから何をしようとしてゐるのかわからなかつた。しかし私には、外界といふものとあまり無縁に暮して来たために、ひとたび外界へ飛び込めば、すべてが容易になり、可能になるやうな幻想が

あつた。／そのとき、私は自分が石に化してしまつたのを感じた。意志も欲望もすべてが石化した。外界は、私の内面とは関わりなく、再び私のまはりに確乎として存在してゐた。／有為子は、私の口だけを見てゐた。そして、そこから、外界へ結びつく力が何一つ出て来ないのを確かめて安心したので。「何よ。へんな真似をして。吃りのくせに」

(第一章)

「私」が、その体については「暗鬱な空想に耽つ」た女に對した場面である。最後の引用については、有為子の側から見透かされていると意識していることが注目されよう。こゝは、語っている「今」の「私」によって整理された認識に従っているのか、その時点での印象であるのか、必ずしも定かではないので微妙ではあるが、「内界と外界」への意識が強いことはいかゞがえよう。ところで、この引用の「私のまわりに確乎として存在」するというイメージは、他の箇所では次のような言葉で変奏される。

・私の心象からも、否、現実世界からも超脱して、どんな種類のうつろひやすさからも無縁に、金閣がこれほど堅固な美を示したことはなかつた！ あらゆる意味を拒絶して、その美がこれほど輝いたことはなかつた。：金閣は、音楽の怖ろしい休止のやうに、鳴りひびく沈黙のやうに、そこに存在し、屹立してゐたのである。

(第三章)

・時にはあれほど私を疎外し、私の外に屹立してゐるやうに思はれた金閣が、今完全に私を包み、その構造の内部に私の位置を許してゐた。

(第五章)

疎外するという機能を持つという意味で、「屹立」が使われている。この言葉が作品の展開と関わって用意されていることはこの引用

から明らかとなるが、他の作品の中にも見出すことができ、「金閣寺」に限つての一回性のものではないことが確認される。

・死は独立し見事に完成したまばゆい形態としてそこに在つたのだ。それは距離といふ繋りからも自由になつたので、明秀の目に見えぬほど目近に在つて彼に對して屹立してゐる。それは彼の内部を支配してゐる不可見の外部の力、いつも彼自身の存在を乗り越えてゐる彼自身の矛盾せる暴力のやうに思はれた。

(盜賊)

・昇は卒然として、そこにゐる青年たちと自分とのちがひに気づいた。彼らはダムを理想や希望やさまざまな觀念に転化しながら彼らの内部に抱いてゐるのだが、昇のダムは外部にある。昇は自分の内部に決して理念を探さうとはしてゐなかつた。外側に屹立してゐる純粹に物質的なダム。みんなと一緒に、昇はしかし別なダムを作るだらう。

(沈める滝)

こゝでも、文脈に差異はあるものの、「屹立」という言葉が、「外部」と對になつて使われている。そのことを苦痛と捉えるかどうかは別にして、「内部」と通交しない「外部」という問題は、ひとり「金閣寺」に固有の問題なのではないと考えることができるのである。先の「金閣寺」第三章の引用の中に見られた「超絶」という言葉についても、「沈める滝」を参照することができる。この場合は、「金閣寺」とは逆の構図をなすものである。

この超絶的な存在が、今、昇の心に与へる親しみは例へやうがなかつた。彼はざつくばらんな態度で、その肩を叩きたいと思つた。彼の内的なものは氷解し、今ほど自分がこのやうな純粹な外部存在に、裸身に触れることはないやうな気がした。

「親しみ」を与えられるというように、逆の構図であることの意味は後に論じるが、「沈める滝」では、三箇所にとわって「超絶的」という言葉が「外部」との関わりで用いられており、昇という人物の本質に関わってくる。こうしたことから、「内界と外界」の問題は「内部」が「外部」に拒まれるという問題にとどまらず、様々な形で、三島の作品に通底するものと見通すことができるだろう。さらに、次のようなモチーフの類似についても視野に入れておこう。「金閣寺」で柏木が「私」に美について論じて持論を展開する箇所である。

さうだ、何と云つたらいいか、虫歯のやうなものなんだ。それは舌にさわり、引つかかり、痛み、自分の存在を主張する。たうとう痛みにたへられなくなつて、歯医者に抜いてもらふ。もしこれがもともと俺の外部存在であつたのなら、どうして、いかなる因縁によつて、俺の内部に結びつき、俺の痛みの根源になりえたのか？ こいつの存在の根拠は何か？ その根拠は俺の内部にあつたのか？」

〔第六章〕

これと、「鏡子の家」の次の箇所を重ねることができよう。

美しい外界が彼に与へていた祝祭的な幻は消え去つた。何一つ彼を傷つけず、彼が呼ぶところへたちどころに無垢な姿を現はす、あの晴朗な外界は潰えてしまつた。その代りに、世界は今、彼の齒にはさまつた異物のやうだつた。

「金閣寺」における「私」の、最初からの外界との不調和と、「鏡子の家」の青年画家の、「沈める滝」と似ている外界との調和が崩壊するということに展開が相反しているとも言えるが、「異物」としての外界ということが齒に関わるイメージで捉えられている点で共

通している。同じ作者の別の作品におけるモチーフの共通性・繰り返しの問題は、漱石をはじめとして、どこまで意識的かという普遍的な問題をはらむが、ここにおいて、三島由紀夫という作者が意識したものとは考えられず、それだけに「内部」と「外部」の違和として見過ごせない事象だといえよう。

このように、「金閣寺」において、「内部と外部」の問題に関わつての「屹立」「超絶」という言葉、齒についてのイメージといった、他の作品にも見られる言葉のつながりが見られることを、「金閣寺」の位相の問題として留意する必要がある。

三

「沈める滝」の昇の有りようが「金閣寺」における「私」の「外界」とのかかりと逆になっていることに触れたが、このほかにも対照的なものとして、「詩を書く少年」や「潮騒」の次の箇所を挙げる事が出来る。

・自分を天才だと思ひ込んでゐながら、ふしぎに少年は自分自身に大した興味を抱いてはゐなかつた。外界のはうがずつと彼を魅した。といふよりも、彼が理由もなく幸福な瞬間には、外界がやすやすと彼の好むがままの形をとつたといふほうが適当であらう。

・少年の心はやすやすと肉体を脱け出して詩について考へる。この瞬間の恍惚感。充実した孤独。非常な軽やかさ。すみずみまで明晰な酩酊。外界と内面との親和。

（いずれも「詩を書く少年」）

・嵐に抗はうといふのではなくて丁度彼の静かな幸福が静かな

自然との連関のなかで確かめられるやうに、今の彼の内部は自然のこの狂躁に、いひしれぬ親しみを感じるのであった。

〔潮騒〕

少年が「自分自身に大した興味を抱いてはいなかった」というのは、自意識に絡め取られている「私」の対極にあることを示している。この「外界と内面との親和」については、「鏡子の家」の次の箇所を重ね合わせる事が出来る。

肉体の外側へ流れ出る血は、内面と外面との無上の親和のしるしであった。彼の美しい肉体が本当に存在するには、筋肉の厚い城壁に囲まれてゐるままでは、何かが足りない。つまり血が足りなかつたのだ。……しかも収に存在を確信させてくれた痛苦と血は、いづれは収の存在を滅ぼすためにしか働かないだらう。

〔第七章〕

しかし、ここでは、やがては「存在を滅ぼす」とこととなるとあるやうに、内部と外部の安定的な調和は一時的なものではない。美貌で、女を魅惑する俳優であり、「金閣寺」の「私」とは全く異質の人物のような存在であるが、「自分が人に与へるべき魅惑と陶醉」の機会を奪われるこの人物は、見かけとは異なって、内面と外面の関係の安定性の欠如という点で、二人は案外と、近いものがあると考えられることもできよう。「内面」という言葉は直接には使われていないが、「金閣寺」において、一箇所「親和」という言葉が登場する。後に「飛翔」のイメージで検討することになるが、蜜蜂を自分で、菊を金閣に見立てた際の、蜜蜂の目になった自分が金閣のように美しい菊を眺めた後に、

私は蜂ではなかつたから菊に誘われもせず、私は菊ではなかつ

たから蜂にしたわれもしなかつた。あらゆる形態の生の流動との、あのやうな親和は消えた。

というものである。「親和」が結局は錯覚でしかなかったことになつた。ここは、「鏡子の家」の収の場合は、少なくとも一度は達成できたわけであり、やはり、峻別しなければなるまい。

このやうに、内部と外部との関わりの様態について、「扉」で隔てられ、開けることがかなわないでいるということと、「親和」の狀態にあるということが両端として三島作品にある。その間に、外部に圧倒されないやうに身構える、あるいは手段を講じる、というような表現で内部と外部の調整を図ろうとする人間を登場させる作品がある。

・もし何らかの形で外界を感じようものなら、それは彼の負けだつたから、その最も完全な勝ち抜きの方々に、次郎はまづ外界に化身しようと思ふにいたつた。

〔旅の墓碑銘〕

次郎の身には故しれぬ期待の快い酩酊がゆきわたつた。島がやさしく迂り寄つて来るその速度は、彼を刻々微妙な美しいのきで包んだ。外界の存在が、世にはいはゆる現実が、この青年を訪れる仕方はかうではなかつた。存在がかくも威厳と融和にみちて、彼の内部へ流れ入るのは、通例彼の自我が円柱の片蔭に暗殺者のやうに隠れて佇む時に限られてゐた。無防禦に外界を迎へ入れることは彼には礼節を欠く行為とさへ思はれ、作品に形式を与へるためには、形式の無慈悲なギロチンの用意がこちら側に整つてゐる要があつた。

〔死の島〕

・一雄は一人ぼっちだつた。外界の無秩序にさからつて、内心の無秩序を純粹化して、ほとんどそいつに化身してしまはうと

さへ企ててゐた。

〔鍵のかかる部屋〕

・自分の内部の層が、心と肉と、はつきり二層に重なつてくるやうである。さう思ふと、自分は精神をすこしづつ掻い出して、それを筋肉に変質させてゆきつつあるやうに思はれる。いづれは精神は全部掻い出されて筋肉になるだらう。彼は完全に外面だけで作られた、完全に外面に浸透された人間になるだらう。心を持たない筋肉だけの人間になるだらう。〔鏡子の家〕

・それでも節子は椅子をずらさうとしない。黙つて立つてゐる彫像を、かうして潮のやうに日光がさし引きする感覚は、どんなものだらうと試みてゐるのである。外界に対する無抵抗、しかも外界を一步も自分の内部へ寄せつけない、そのブロンズの感覚はどんなものであらうか、と。〔美德のよろめき〕

・悦子にとつては、外界の出来事とは、自分の肉体の上に行はれることをも包含してゐた。どこから悦子の外部がはじまるのか？ この微妙な操作をわきまへた女の内部は、幽閉され、窒息させられ、爆発物のやうな潜在的な力を包むにいたつた。

〔愛の渇き〕

この引用の二つ目での、「酩酊」、「融和」は、先の「詩を書く少年」からの引用と重なり、「外界と内面との親和」を思わせる。また、一番目と三番目に「化身」という言葉が使われていることも注目に値しよう。つまり、「化身」するといふやうに、優位な立場にはないものの、「負け」ないために、自らの主体の發揮によつてスタンスを変えることによつて、「外界」に拮抗するのである。これは、四番目についても言え、五番目も「化身」とは記されていないものの、「彫像」にならうと「試みている」訳である。このように自ら

の身を処そうとする人物が、作品の枠を超えて少なからず登場することは看過できないことであらう。また、二、五番目では、「外界」が「内部」に入つてこようとするといふやうに、「金閣寺」とはベクトルが逆である。このことはきわめて重要である。通例は「無防禦」ではないといふことと「無抵抗」でいられるといふのは全く逆のやうに見えもするが、それぞれのスタイルにおいて「外界」に対して「内界」を優位に保つといふことで共通する。五、六番目について考察しよう。二人の女性とも、「外部」と「内部」の境目があいまいである。しかも、節子という女性が、日常生活においては、強い意志力を持つような存在としては描かれていないにもかかわらず、「操作」する能力があるといふことが注目されよう。自らが内部を「幽閉」することによつて、「潜在的な力」を獲得するといふのである。亡き夫の父である老人に身を任すことに対して、周囲から非難めいた、また、興味本位に見られるこの女性は、しかし、「金閣寺」の「私」とは異なり、「架空の生」を生きているわけではないのである。

ところで、この「化身」も「酩酊」も「金閣寺」に見出すことが出来るのである。

・金閣の美の与へる酩酊が私の一部分を不透明にしており、この酩酊は他のあらゆる酩酊を私から奪つてゐたので、それに対抗するためには、別に私の意志によつて明晰な部分を確保せねばならなかつた。〔第六章〕

・音楽は夢に似てゐる。と同時に、夢とは反対のもの、一段とたしかな覚醒の状態にも似てゐる。…とまれ音楽は、この二つの反対のものを、時には逆転させるやうな力を備へてゐた。そ

して自ら奏でる「御所車」の曲の調べに、時たま私はやすやすと化身した。私の精神は音楽に化身するたのしみを知った。／＼尺八を吹き終つて、いつも私は思つたが、金閣はだうしてこのやうな私の化身を、咎めたり邪魔したりしないで、黙過してくれるのだらうか？ 他方、人生の幸福や快楽に私が化身しようとするとき、金閣は一度でも見のがしてくれたことがあつたか？ …なぜ音楽にかぎつて、金閣は私の酩酊と忘我を許すのか？／＼金閣が黙認している以上、音楽はいかに生に似通つて見えても塵物の架空の生でしかなく、たとへそれに私が化身しよう、その化身はかりそめのものでしかなかつたからである。

〔第七章〕

「私の外に屹立」するという表現が見られたように、金閣寺が外界との同義語として使われる場合もある。「化身」が、金閣寺によつて許された、「かりそめのものでしかな」ということで、この言葉をめぐる「金閣寺」の「私」の他とは異なる位相が浮び上るだろう。「酩酊」についても、「詩を書く少年」では、「すみずみまで明晰な酩酊」とあり、「意思によつて明晰な部分を確保せねばならなかつた」「私」との対照は明らかであろう。「音楽」は三島作品においても重要なモチーフであるが、「化身」と「酩酊」とが、同一箇所が使われているものとして、次のような箇所とも対照することができよう。

恭子はさういふ感情に化身した。おぼろげに背光の中に動いてゐる彼の若い雄々しい頭部を、彼女は自分の上にひろがる上げ潮のやうな影のうちに涵してしまへるとはつきり感じた。彼女の内部は外側へ溢れ出で、内部でもつて直に外部に触れた。酩

酊のさなかに襲はれてをのいたのである。〔禁色〕

ここでは、「酩酊のさなかに襲はれてをのいた」とあるものの、「化身」することは困難ではなかつたのである。「溢れ出」ずるとは、「罪」の「鍵」も必要ない状況だといえる。

また、「鍵のかかる部屋」の先の引用の中の「無秩序」という言葉も注目される。引用より前の部分には、敗戦後の人々の様子について、「押し黙つた多くの顔の底に、ひとつひとつ無秩序が住んでいて、…一度共鳴したら、とても住みよくなるのだ。」ともある。「内心の無秩序を純粹化」し、それに「化身」することによつて、自らの存在を確保しようとするのである。「金閣寺」でも、次のようにある。

あの豪胆で、残酷な、鋭い目をした士官は、まさに悪へ向つて駈け出したのだと私は思つた。…朝焼けのやうな無秩序があつた。…無秩序の輝く鐘樓の鐘は鳴つてゐる。／＼世間の人たちが、生活と行動で悪を味はふなら、私は内界の悪に、出来るだけ深く沈んでやろう。〔第三章〕

敗戦後、ある軍人が物資を横流しして、個人的な利益を上げようとしているのを目撃する場面である。この場合は、自らの「内界」に「沈」むことによつて自らの足場を築こうとするのである。「鍵のかかる部屋」のように「外界の無秩序にさから」うことはできないのである。この言葉について、さらに他の作品にも目を向けよう。「他人の自由を最大限に容認して、誰よりも無秩序を愛して」いた鏡子の別荘での、様々な人々の無遠慮な振り舞いを回想してである。先に歯のイメージで引用した部分の直前の部分である。

・他人の存在に左右されてゐるこんな時間には、色彩もなければ

ば構図もなかつた。世界はグロテスクな海月のやうな姿で浮動してゐた。それが夏雄に、箱根の早春の何とも云へない無秩序な色彩を思ひ出させた。美しい外界が彼に与へてゐた祝祭的な幻は消え去つた。

(「鏡子の家」)

これは「彼と外界との構図は潰え、遠近法は崩れてしまつた」人物が直面したものである。先の引用と重ねると「異物」として違和感を抱え込む「無秩序」な外界に対して、このように、自らが「無秩序」になるか、「化身」によつて対抗するかなどの違いがあるが、このことにおいても「世間の人々」とは違つた「私」の有りようが浮かび上がる。

四

このように検討するとき、「金閣寺」の主人公が置かれてゐる位相がはっきりとするだろう。「内界」と「外界」とのせめぎ合いに對して、内へと沈潜するのである。このことを確認した上で、次のやうな比喩表現に注目しよう。

吃りが、最初の音を発するために焦りにあせつてゐるあひだ、彼は内界の濃密な霧から身を引き離さうとじたばたしてゐる小鳥にも似てゐる。やつと身を引き離れたときには、もう遅い。

なるほど外界の現実、私がじたばたしてゐるあひだ、手を休めて待つていてくれるやうに思はれる場合もある。しかし待つてゐてくれる現実、それはもう新鮮な現実ではない。私が手間をかけてやつと外界に達してみても、いつもそこには、瞬間に変色し、ずれてしまつた、…さうしてそれだけが私にふさはしく思はれる、鮮度の落ちた現実、半ば腐臭を放つ現実が、横たはつてゐる

るばかりであつた。

(「第一章」)

鳥が外界へと飛び出そうとするが思うやうに行かない。これとは逆方向となる表現が、「金閣寺」自身にも、本稿一章でも引用した次のやうな箇所を確認される。

私の胸は高鳴つた。出発せねばならぬ。この言葉はほとんど羽搏いてゐると云つてよかつた。

(「第七章」)

この旅の途中で、突然、「金閣を焼かなければならぬ」という「想念に搏たれ」ることになる。「搏」という文字が共通して用いられているのも偶然ではあるまい。しかもこの「羽搏」という言葉は、一章で引用した、金閣寺を焼きに行こうとする際の、言葉を釣瓶にたとえた上での、「釣瓶はかるがると羽搏かんばかりにありがり」に重なるものでもある。飛翔を目指して進行するが、それが最終的には成就しないという展開が確認されるのである。他に次のやうな箇所もある。

・明日こそは金閣が焼けるだらう。空間を充たしてゐたあの形態が失はれるだらう。…そのとき頂きの鳳凰は不死鳥のやうによみがへり飛び翔つだらう。そして形態に縛しめられてゐた金閣は、身もかるがると碇を離れていたところに現はれ、…

(「第二章」)

・私は蜂の目になつて見ようとした。菊は一点の瑕瑾もない黄いろい端正な花瓣をひろげてゐた。それは正に小さな金閣のやうに美しく、…蜜蜂の欲望にふさはしいものになつてゐた。形のない、飛翔し、流れ、力動する欲望の前に、…それ自身、黄いろい豪華な鎧を着けた蜂のやうになつて、今にも茎を離れて飛び翔たうとするかのやうに、

(「第七章」)

金閣、あるいは鳳凰は飛翔し得ると「私」は捉えるのである。これらのことも、飛翔を拒まれる「私」が「金閣を焼かなければならぬ」という思いを強める一因となろう。これに似通ったものは、他の作品にも次のようなものが見られる。

・祖母も父も（ひとり母のみが私の理解者であつたが）陥らざるを得なかつた同じやうな誤りは、私を誤診し、療法を誤つたものといへる。夢想は私の飛翔を、一度だつて妨げはしなかつた。私は夙に、彼等が考へるのと別種の飛翔を飛翔してゐた。

その夢想に沈んでゐる外見から見て、内部のいかに広闊な天空を、星座から星座へと経廻りつつ、私が翼をひろげて飛んでゐるか、知るすべもなかつた彼等は、私にからまつてゐるキラ／＼した蜘蛛の網を無理強ひにとり去つたけれど、蜘蛛の網とみえたのは実はかげろふのそのやうな脆美な私の翼であつた。私の本来のものなる飛翔を妨げたのは、彼等自身に他ならなかつた。

〔岬にての物語〕

・そして山鳥が翔つたあと、彼の目はそれほど遠く鳥の行方を辿りはしなかつたが、心にはなほいきいきと、急激にひろげられた巨きな翼や、灌木を蹴つた強い肢の緊張などの影像が残つてゐた。その翼の先端は、ほとんど彼の頬を擦つたのだ。

『何かが僕のなかから飛び去つてしまつたのぢやないか』と急坂をのぼる喘ぎと共にしきりに思つた。『あの鳥は一体何だ。あれはまるで僕の内部から、無遠慮に翼をひろげて飛び翔つたかのやうだつた。飛び去つたのは、僕の魂ぢやなからうか』

〔鏡子の家〕

「飛翔」という表現は使われていないが、後の引用と似たような

内部から何かが抜け出すというイメージを持つものが次のように見られる。

・それから一方の寝台にぼんやり腰かけてゐる次郎の姿が映るだけである。それだけに鏡の飢渴はますます甚だしく、一人で船室にゐると、何かが自分の内部から剥奪されてゆくやうな心地がした。

〔火山の休暇〕

これらのイメージは、「剝奪」という言葉に見られるように、主体的な意志は、必ずしも関与していない。しかし、少なくともそこには苦痛は見られないのであり、「金閣寺」の「身を引き離」そうとする苦闘の姿は異質というほかはない。ここでの「鏡子の家」の青年画家は、先にも引用した、「美しい外界が彼に与えていた祝祭的な幻」を失つたのであるはずだが、その痛苦の色彩はきわめて薄い。「鏡子の家」の別の青年である収も、先に見たように、「肉体の外へ流れ出る血」が親和を導き出すとあり、「禁色」の恭子についても引用したように、「内部は外部に溢れ出で」とあつた。さらに次のやうなものとも繋げて考えることが出来るだろう。

・なぜならその時清子は、半ば目をつぶつて、人が自己に内在しながら自己を超えてゆくものを意識するときの、あのいたましい陶酔に心をゆすぶられて、(さうだ、彼女も亦、無意志の行為を一つ一つなぞつてゆく意識の追究をうけてゐたのだから)きわめて意識的にはつきりと明秀の後姿に呼びかけてゐたからである。

〔盗賊〕

・悦子は振向かない。彼女は内面的なものがあいまいな不安定な泥濘の中から立上つて、彼女の外面へ、ほとんど膂力のやうな一種の肉体的な力になつてひらめき出るのを感じた。

〔愛の渴き〕

この最初の引用については、初めのほうで同じ作品から引用した箇所「いつも彼自身の存在を乗り越えていく彼自身の矛盾せる暴力」という表現と類似していることが注意されよう。本人が意識しないままに内部から外部へと流出するというイメージが多くの作品から見出すことができるのであり、こうしたものと対比するとき、「金閣寺」の主人公が置かれている、内に沈潜するしかないという状況がより鮮明になるだろう。

その「私」の有りようにやや近いものとしては、次のような例をあげることが出来るかもしれない。「陶酔」という言葉が先の引用と対比されよう。この言葉自体は、本論の三章で言及した、「酩酊」との類似性を押さえないければならないだろう。

・ 治英は少年時代から、陶酔的な生や外界の事物に対する或る疎遠な感じを抱いてゐたらしく思はれる。

・ 彼にとつては、冷たい画布や画用紙は自分の心に在つて、そこに定着されたものしか愛することができなかった。外界がまだ体温を保ち、彼の呼び声にこたへる状態にあることは彼を不安にした。ただ単に彼の感覚の反映であるやうな外界の事物だけをみとめなければならぬ。人間はこれを排除しなければならぬ。

〔貴頭〕

しかし、ここにおいても、「金閣寺」の主人公の喘ぎとははるかに遠いというほかはない。

五

こうして見てくると、ここに、「豊饒の海」四巻を通して一貫し

て登場する人物である本多の存在をクローズアップすることが求めているのではあるまいか。

・ いや、自分はどんな情念にも化身することはできないのではないか。内部へさういうものの浸透を許す資質が、自分には欠けてゐる。

・ どうして自分は、整然とした秩序を外にも内にも保つことに専念し、清頭のやうに、火や風や水や土、あの不定形な四大を体内に宿すことがないのだろうか。

・ 決して外界に接しない性質の本多にとつて、ここではすべてが肌をとほして感じられ、

・ 外から人をつかんで、むりやり人を引きずり廻すものが運命だとすれば、清頭さんも勲さんも、ジン・ジャンも運命を持つてゐたわ。では、あなたを外からつかんだものは何？

「化身」できないこと、「秩序」を保つことは、先に見た他の作品群の登場人物たちと対比されるものであり、「化身」が「かりそめのもの」でしかなかった「金閣寺」の主人公と重なるものである。しかし、本多は「金閣寺」の「私」とは違って、「化身」への願望のようなものは、あらかじめ失われている。「外界に接しない性質」ともあるのも、「内界」から「外界」への通路を求めて苦悩する「私」とは正反対である。一言で言えば、「私」はまさに青春そのものであるが、本多ははじめから老人ではなかったか。本多とは対極にあるような清頭も、「体内をただうつるな風が吹いてゐた。今ほど優雅からも遠く、美からさへ遠く隔たつた自分を感じたことはなかった」という思いをすることがあった。ここに「金閣寺」の「私」が、「風はそこを自在に吹きかよう」ことを夢見るが、実現さ

れずに終わることを並べることができよう。清頭は、あるいは「金閣寺」の「私」を反転させた存在といえるかもしれないが、「豊饒の海」を今見渡す余裕はない。

このように辿ってきたとき、「金閣寺」の「私」という存在の意味を、あるいは「金閣寺」というテクストの三島作品における位相を、「内部と外部」という視点を軸として、作品の枠を超えて多用される、言葉、イメージを対比することを通して、特徴付けることが可能になったのではないだろうか。あるいは、「金閣寺」は、そのようなことを許す作品として存在しているというべきかも知れない。

引用は『三島由紀夫全集』によった。

—本学大学院教授—